

和歌山県立

もん じょ かん

文書館だまり

第37号 平成23年7月



漱石が見た百年前の和歌山
—写真・小説・日記・新聞記事より—

明治四四年（一九一一年）八月、夏目漱石は大阪朝日新聞社主催の関西講演の講師として、明石、和歌山、堺、大阪を巡回しました。本年は漱石が和歌山を訪れて百年目にあたります。ここでは、明治末前後の写真に漱石の『行人』、『日記』及び『大阪朝日新聞』明治四四年八月一七・八日付け記事（以下「記事」と表記します）などを織り交ぜながら和歌山での立ち寄り先を再現します。

【南海鉄道で和歌山市へ】

八月一四日（月）、当日は快晴、漱石



①南海鉄道の食堂車両

は南海鉄道の急行列車で和歌山市にやってきました。当時、難波・和歌山市間は、明治三九年から投入された浪速号・和歌号と名付けた蒸気機関車が牽引する急行列車で一日四往復、片道約二時間内外で結ばれていました。南海鉄道本線が全線電化されたのは、同四四年一月のことです。漱石の日記には「九時五十二分の汽車で和歌山に行く事にする。」と記されています。和歌山講演では漱石の他、牧放浪、後醍醐院廬山が登壇しましたが、このうち、廬山が発車時刻に間に合わず、一行と合流するのは翌日の早朝でした。列車内の様子は、「記事」では次のようでした。「孟蘭盆会に加ふるに、汽車賃の大割引あり、各等共身動きのならぬ人出なり。南海の好意にて、貸切車を給されたる、一行のみは楽々と座を占め



②明治末期頃の和歌山市駅

つ。」漱石一行のために、貸し切り車両が設定されました。漱石達は列車食堂で食事をしようです。①は車内の食堂の様子です。『南海電気鉄道百年史』によると、「女性二名は喫茶室主任と称して、もっぱら接客につとめた。大塚取締役じきじきの面接試験による採用女性は「教養ある洋装美人」として乗客の間の評判は大へんなものであった。」と言います。小説『行人』（以下「小説」と表記します）では、「自分達は狭い列車のなかの食堂で昼飯を食った。「給仕がみんな女だから面白い。しかも中々別嬪があますぜ、白いエプロンを掛けてね。是非中で昼飯を遣つて御覧なさい」と岡田が自分に注意したから、自分は皿を運んだりサイダーを注いだりする女を能く心付て見た。然し別には是といふ程の器量を有つ



③電車に乗り換え和歌の浦へ

たものもぬなかつた。」と素っ気なく書いています。グルメの漱石が何を食べたのかも興味のあるところですよ。

【電車で和歌の浦へ】

②は明治末頃の和歌山市駅です。駅を出て東側（向かって右）に和歌山水力電気株の電車乗り場③があります。「停車場を出ると直其処に電車が待つてゐた。兄と自分は手提鞆を持った儘婦人を扶けて急いでそれに乗り込んだ。電車は自分達四人が一度に這入つた丈で、中々動き出さなかつた。「閑静な電車ですな」と自分が侮るやうに云つた。「是なら妾達の荷物を持つても宜さうだね」と母は停車場の方を顧みた。所へ書物を持つた書生体の男だの、扇を使ふ商人風の男だのが二三人前後して車台上がつてばらばらに腰を掛始めたので、運転手



④京橋

は遂に把手を動かしました。」(小説) 当時の電車は一五分間隔の運行で、定員は三五名でした。「自分達は何だか市の外郭らしい淋しい土塀つゞきの狭い町を曲つて、二三度停留所を通り越した後、高い石垣の下にある壕を見た。壕の中には蓮が一面に青い葉を浮かべてゐた。其青い葉の中に、点々と咲く紅の花が、落ち付かない自分達の眼をちらちらさせた。」(小説) 「市の外郭らしい淋しい土塀つゞきの狭い町」とは和歌山市停車場を出て山吹丁を過ぎ、本町通りに入るカーブまでの区間です。停留所は山吹丁、本町、京橋と続きます。④は明治末期の京橋です。一時期は橋脚が白く塗られたり、欄干が鉄製になるなど、和洋折衷の時代もあった京橋ですが、写真では欄干擬宝珠付きの木造で、旧藩時代と較べると拡張



⑤公園前

されたものの、古風を残しています。翌日講演会場となる県会議事堂を左手に見ながら公園前のカーブ(⑤)を過ぎ、左手に和歌山城の北堀が見えてきます。⑥は今の伏虎中学校前から見上げた和歌山城です。堀にはハスがびっしりと生えていて、よくみると花も見えます。城内二の丸に見えている建物は物産陳列場です。「高い石垣」とはこの二の丸北側の石垣で、堀に一面に繁茂するハスとその花が印象的だったのでしよう。このハスをもともとレンコン採取のために栽培されたもので、内堀東側にかけて一面に見られました。電車は天守閣を見上げながら進みます。「へえー是が昔のお城かね」と母は感心してゐた。母の叔母といふのが、昔し紀州家の奥に勤めてゐたとか云ふので、母は一層感慨の念が深かつたの



⑥高い石垣とハスの花



⑦明光橋西詰めの和歌の浦停留所

だらう。自分も子供の時、折々耳にした紀州様、紀州様といふ封建時代の言葉を不図思ひ出した。」(小説) ここから和歌の浦に着くまでは、小説では特に記述がありません。「和歌山市を通り越して少し田舎道を走ると、電車はぢき和歌の浦へ着いた。」とあるのみです。東京育ちの漱石にとっては文字通り田舎の風景としか写らなかつたのでしょう。

⑦は漱石達が降り立った和歌の浦停留所付近です。明光橋の西詰め、色塗りされた電柱(矢印)が停留所を示しています。宿所に向かった一行は、小説では「抜け目のない岡田はかねてから注意して土地で一流の宿屋へ室の注文をしたのだが、生憎避暑の客が込み合つて、眺めの好い座敷が塞がつてゐるとかで、自分達

は直に俵を命じて浜手の角を曲がった。」となつています。「土地で一流の宿屋」とは芦辺屋旅館(⑧)のことです。南方熊楠と孫文が宴を張つたことでも知られる芦辺屋は、和歌の浦では一流の旅館として著名でした。ところが、日記に「あしべやの別荘には菊池総長があるので、望海楼といふのにとまる。」とあるように、京都帝国大学総長菊池大麓との同宿を避けて急遽宿所を変更したのが真相です。この変更は余程急だったらしく、遅れてやって来た廬山がそれとは知らず予定どおり芦辺屋に泊まったため、合流するの角が⑧にみるとおり、芦辺屋前を過ぎ不老橋を左手に見ながら曲がる地点です。⑨は埋め立て前の干潟からの望海楼の姿です。この写真ではよくわかりま



⑧芦辺屋



⑨宿所の望海楼

安畳を眺めると、何となく殺風景な感が起こつた。」と、芳しくありません。それはともかく、一行は「和歌浦望海楼に着いたのが午後一時、三階の風通し好き一室に浴衣掛となり、更に一風呂浴びた時の心地何とも云へず。ぐつすり一寝入りし、晩涼を趁うて海抜二百尺、東洋第一と銘打つたる明光台に上る、エレベーターちふものにてせりあげらる、なり」(「記事」と、休息をとつてから裏の奠供山に登ります。

【エレベーター見物】

エレベーターは客寄せのため、望海楼主人中尾文吉が建設、前年一〇月一日の開業です。開業直前の「紀伊毎日新聞」には、「水色に塗つた鉄の格子から浦曲の景色を見渡せば、活動写真を見る如く一秒一秒と其趣が変化する、洲崎の松、お旅所の鳥居さては不老橋も紀三井寺も瞬く内に下界遙かに遠くなる。」と刻々と変化する景色に感心しきりです。エレベーターの動力は一五馬力の電気モーターで、上下する速さは同紙記者の計測

せんが、当時は手前の干潟と現市町川とは細長い石積み堤防で区分されていました。右の二階建てが本館です。小説に「海をまん前に控へた高い三階の上層の一室に入った」とあることから、漱石達が入つたのは左の新館です。明治四一年に落成した新館は、当時の新聞広告によると、一階が玉突場、二階が大広間、三階が貴賓室になっていました。予定変更となつたからではないでしょうが、漱石にとつて望海楼の設備は気に入つたものではなかつたようです。小説では「其処は南と西の開いた広い座敷だつたが、普請は気の利いた東京の下宿屋位なもので、品位からいふと大阪の旅館とはてんで比べ物にならなかつた。時々大一座でもあつた時に使ふ二階は打つ通しの大広間で伽藍堂の様な真中に立つて、波を打つた



⑩エレベーターの「牢屋に似た箱」

兄と自分は猿に芋を遣つたり、からかつたりして、物の十分もその茶屋で費やした。」(小説)表紙写真は奠供山上から出島方面の眺望です。御手洗池を巡る道路の一部が右端に見えています。眼下の市町川に見える

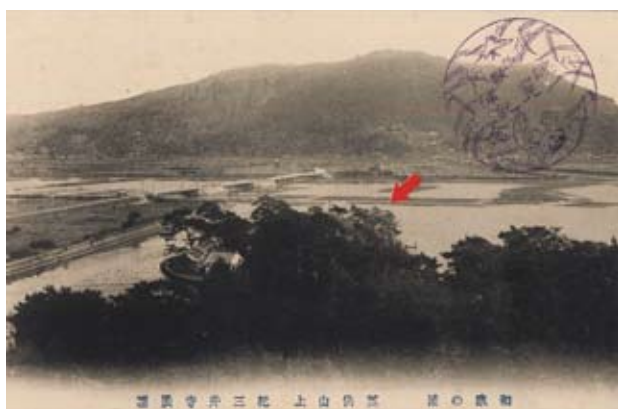
によれば、上り降りそれぞれ二分三秒かかつたと言いますから、現在の私達からは途方もなく緩慢に感じられます。⑩は、頂上降り口の光景です。人物が立っているところは棧橋状の通路で、山に向かつて広がる形になっていました。当時の新聞によれば六〇畳敷の広さがありました。エレベーターの乗り物は、手前の人物と較べるととても窮屈そうです。漱石によると「箱は一間四方位のもので、中に五六人這入ると戸を閉めて、すぐ引き上げられた。兄と自分は顔さへ出す事の出来ない鉄の棒の間から外を見た。さうして非常に鬱陶しい感じを起した。「牢屋みたいだな」と兄が低い声で私語いた。」(小説)となります。

【奠供山上からの眺め】

「牢屋に似た箱の上り詰めた頂点は、小さい岩山の天辺であつた。そのところどころに背の低い松が嚙りつくやうに青味を添えて、単調を破るのが、夏の目に嬉しく映つた。さうして僅かな平地に掛け茶屋があつて、猿が一匹飼つてあつた。

曙橋を渡つて海岸に突き当たると、右に富士屋支店(この写真ではエレベーターに隠れて見えません)、左には片男波館(二棟見えます)がありました。ここから右に向け松林が続いています。遠く新和歌浦にはまだ旅館街は出来ていません。小説で「新和歌ノ浦とかいふ禿げて茶色になつた山」と書いているとおりの光景です。「掛け茶屋」とは本来は葭簀などをさしかけた簡単な休憩所のことです。手前の小屋とは別に立て掛けたものだったのでしようか。

反対方向を向くと、紀三井寺方面を遠望します。「其処は高い地勢のお蔭で四方とも能く見晴らされた。ことに有名な紀三井寺を翳鬱した木立の中に遠く望むことが出来た。其麓に入江らしく穏かに光る水が又海浜とは思はれない沢辺の景



⑪紀三井寺遠望

色を、複雑な色に描き出してゐた。自分は傍に居る人から浄瑠璃にある下り松といふのを教えて貰つた。其松は成程懸崖を伝ふ様に逆に枝を伸してゐた。(小説) 漱石が教えてもらった「下り松」は妹背山の松です。(⑪の矢印)

漱石以前に和歌の浦を訪れた渋川玄耳は、藪野椋十のペンネームで著した『上方見物』(明治四一年 遊楽社刊)の中で、奠供山からの眺めを次のように述べています。「大きく彎つた砂濱、処々の松原、村里、田圃、川、橋、寺、社、丘、山、峰と数々の景が都合よく散ばつて見える丁度天然自然の大きな繪屏風。俺が見物をした諸国の景色の中に此れ程手の込んだものを、一目に見られる様寄せ集めた處は無かつた。」江戸中期に和歌の浦を訪れた貝原益軒は、当地の風景を激賞していますが、明治になつてもこのように言う人がいたことには驚かされます。渋川玄耳は、東京朝日新聞社では豪腕社会部長として知られ、漱石とは親交が深かつた人物です。



⑫漱石が辟易した石段

東道者にとて伴ひ来れる楼婢、白銅貨一枚を賽銭箱に投げ入れ、漱石君柏手をうつて仏恩を謝す、観音様も定めて面喰ひしなるべし。」(「記事」) 日記にも「牧氏と余は石段に降参す」とあり、余程堪



⑬境内からの眺め

【奠供山を下りて紀三井寺へ】

「荒れ果たる玉津島神社の境内を抜け電車にて紀三井寺へと足を向く、西国三十三箇所第二番の札所なり。高き石段を見上げた時、喟然として嘆息を漏らせる、漱石君を励ましつゝ、山門に着いた



⑭三階の手摺りから見える看板

【望海楼からの眺め】

えたようです。境内からは「薄暮の景色」(日記)を見ています。「眼の下には遙の海が鰯の腹のやうに輝いた。其処へ名残の太陽が一面に射して、眩ゆさが赤く頬を染める如くに感じた。」(小説) ⑬は前年の明治四三年頃の境内からの眺めです。漱石もほぼ同様の景色を見たことになりましたが、眼下に見える塩田は同年九月三〇日で廃止されています。

漱石は望海楼から見た風景も小説に取り込んでいます。⑭は望海楼新館とエレベーター入り口の門です。門の屋根には看板(矢印)が立ち、「東洋第一・海抜二百尺・エレベーター・明光台」の文字があります。小説で「手摺の所へ来て、隣に見える東洋第一エレベーターと云ふ看板を眺めてゐた。」というのはこの看板のことでしょう。なお、漱石達を通された部屋は先に「三階の風通し好き一室」となっていました。小説には「そこは南と西の開いた広い座敷だったが」とありますので、記述通りであれば三階のいちばん左が彼らの部屋だったことになると思います。

⑮は曙橋付近から見た望海楼です。市町川には海苔養殖のメダケが植え込まれています。小船は海苔養殖関係のものでしょう。小説では、「宿の下には可成大きな堀割があつた。それが何うして海へつゞいてゐるか一寸解らなかつたが、夕方には漁船が一二艘何所からか漕ぎ寄せて来て、緩やかに楼の前を通り過ぎた」とあつて、「可成大きな堀割」は写真の市町川です。「漕ぎ寄せて来」た漁船というのもこのような船であつたかもしれません。

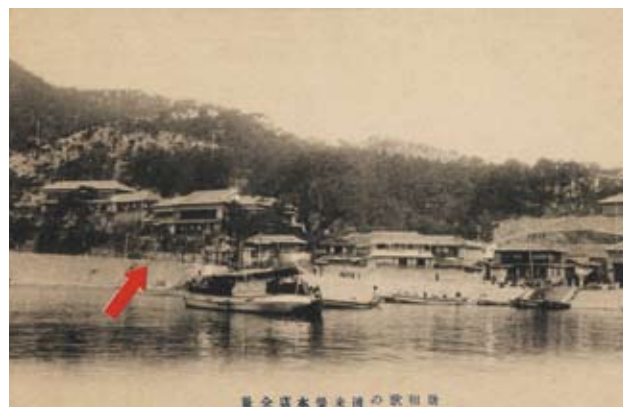


⑮市町川の船

い煙となつて空に打上げられる様が、明かに見えた。」(小説) この記述は、望海楼を出て右方向に市町川沿いに一二歩歩き、左に折れるとすぐに曙橋を渡って海岸に向かう道順を述べています。突き当たりにある旅館や松林については、先に表紙写真のところで説明したとおりです。漱石は「田」と言っていますが、水田があった訳ではなく、道路の右側のほとんどが埋め立てられ、畑地となっていたものです。⑯は明治四二年夏、奠供山から片男波海岸を撮影した写真の一部です。富士屋支店と松林が見えます。土手に上がる坂道が三か所(矢印)あって、漱石の言う「だらだら坂」と符合します。望海楼では「紀伊毎日の千田、井辺両君と晚餐を共にし」(記事)しました。暑苦しい夜でしたので、「縁側の戸障子を



⑯手前の岩は奠供山の一部です



⑰トンネルに通じる道路

開け放したま、蚊帳の中に藻ぐり込(記事)みますが、漱石は「日記」で「夫でも寐苦しい。」と言っています。翌朝、漱石は「涼しさや蚊帳の中より和歌の浦」「四国路の方へなたれぬ雲の峰」の二句を詠んでいます。

【新和歌浦見物】
講演当日早朝、遅れて来た後醍醐院廬山と速記係の高島某が合流し、漱石一行は人力車に乗って精力的に名所見物に出掛けます。まず、開発の端緒についた新和歌浦を見物しました。「太縞の揃への浴衣五人、お定まりの名所見物と出かく、先づ新和歌の浦といふ方へ車を進めつ、漁師町を過ぐれば浦曲伝ひの新道路見事に切り開かれたり、道は絶崖に沿ふ、崖下に寄する白波の雪と散り花と乱れて水煙を立つるさま、せ、こましけれど、又

棄て難くも眺められぬ、聞けば泉下の富豪森田長者議員独力の出資によりて此の新道をなせるものとか、おッ魂消つ、引返して紀州侯の祖廟を見、又名所尽しの権現さまに詣りぬ。」(記事)「浦曲伝ひの新道路」とは、⑰の矢印で示した第一・第二トンネルに通じる道路です。新和歌浦見物は、当地の開発者森田庄兵衛の招きによるものですが、漱石は「トン子ル二つ。運動場といふのは砲台の出来損の如し。」と日記に残しています。「権現様」(紀州東照宮)見物のあと、片男波海岸に向かいますが、ここで漱石は思わぬ波しぶきの洗礼を受けることになりました。⑱は明治四二・三年頃の片男波海岸です。陸側の堤防は土手、海に面した側は石造の二重堤防です。間の溝は今風に言えば越波排水路と言えるでしょう。



⑱片男波海岸



⑲漱石は片男波館の右手の建物を「怪しい藁屋」と表現しています

小説では「自分達は遂に其土手の上へ出た。波は土手のもう一つ先にある厚く築き上げられた石垣に当つて、見事に粉微塵となつた末、煮え返るやうな色を起して空を吹くのが常であつたが、たまには崩れたなり石垣の上を流れ越えて、ざつと内側へ落ち込んだりする大きいのもあつた。」と大波が打ち寄せる海岸の光景を克明に描写し、「石の堤に当たつて碎けた波が、吹き上る泡と脚を洗ふ流れとで、自分を濡鼠の如くにした。自分は母に叱られながら、ぼたぼた雫を垂らして、三人と共に宿に帰つた。」となつています。実際はどうだったのでしょうか。同行記者の記事では、「岸辺に立ちて片男浪の寄せくるを飽かず眺め入りたり、何時もなく浪荒しとのことにて、逆立つ浪頭は悪龍の怒号にも似つ、凄しく人立し



②①講演会場の県会議事堂

て防波堤を嘔みては又嘔む、漱石君そゝろ興をや催しけん、歩一步、岸に近づく
と見るまにザブリと潮を浴びて首を縮める、放浪君も我輩もつぶ濡れとなつて袂
をしぼる、和歌の浦には名所も御座れど
我等には先づ之が第一の御馳走にてあり
たり。」現実に濡れ鼠となつたよう
で、漱石の歓声が聞こえてきそうです。小説
では「濡鼠」になる直前に「向の石垣迄
突き出してゐる掛茶屋から防波堤の上に
馳け上がった。」となつています。先の
⑱の写真には海側の石積み堤防と陸側の
土堤に掛け渡した休憩所のようなもの
が見え、日覆いも確認できます。小説の「掛
け茶屋」を想起させる写真です。
【講演と慰労会・富士屋旅館での一夜】
県会議事堂での講演は午後一時開演で
す。電車で和歌山市内に向かう途中、雨

が降り出しました。台風が近づいており、
「県会議事堂は蒸し熱い事夥し。」と漱石
が日記に記すほどでした。後醍醐院廬山の
「海に行け」、牧放浪の「清国における列
国の利害関係」に続いて漱石は「現代日
本の開化」と題して講演を行いました。
漱石は文筆家・編集者の他に文明批評家
としての側面を持っていましたが、この
ときの講演は優れた文明批評として著名
で、彼の思想の核心と言われています。
講演内容は速記録をもとにした、『朝日
講演集』や『漱石全集』で読むことがで
きます。講演終了後、有志による慰労会
が催されました。会場は十一番丁にあつ
た風月庵という料亭です。②①は風月庵の
入り口で、②②は中庭と離れです。「宴会
を開くといふから固辞しても聞かず、已
を得ず風月といふのに赴き離れで待つて



②①風月庵の外構え

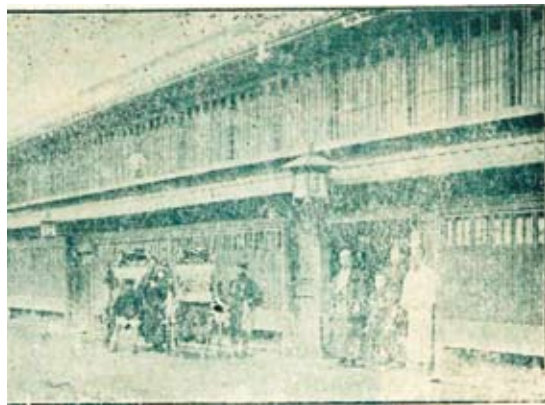
ある。宴開くる頃から風雨となる。」(日
記)宴会が終わる頃には外は吹降りです。
望海楼の前まで浸水して通行が危険だと
か、電話が通じるから大丈夫だとか、色々
な噂が飛び交う中、漱石と牧放浪は、と
りあえず本町三丁目の富士屋旅館に入
りました。後醍醐院廬山をはじめ、和歌の浦
行きを主張した人たちは、人力車で六番
丁の紀伊毎日新聞前の公園前停留所まで
行き、電車を待ちましたが、「電車は来
るには来るが向へ行くのは何とかの松原
迄で其先は松が倒れて行けないといふ。
何時迄待つても埒が明かないので」(記
事)結局は漱石達と合流しました。
富士屋旅館は、和歌山市内では有田屋
に次ぐ有名旅館でした。小説では、先の
風月庵が「立派な御茶屋」「東京辺の安
料理屋より却て好い位」と良好であるの



②②風月庵の離れ

に対して、富士屋旅館は「古めかしい
座敷」「柱は時代で黒く光つてゐた。天
井にも煤の色が一面に見えた。」と言
い、印象が良くありません。加えて日記では
「電灯が消える、ランプを着ける。其ラ
ンプが又消える。」という有様で、現実
はどうだったか定かではありませんが、
小説では蠟燭や行灯まで出され、「其行
灯が又古風な陰気なもの」でした。
翌日、人力車を雇い、望海楼まで荷物
を取りに行かせますが、「つな引きでな
ければ行けぬ」と言われ、車夫を二人雇
い、「後で壹圓八十銭平生の三倍取られ
る」(いずれも日記)とあって、漱石に
とって散々な和歌山旅行でしたが、小説
の取材にはこと欠かない旅でした。(『行
人』『日記』は岩波書店『漱石全集』か
らの引用です。)

(溝端佳則)



②③富士屋旅館

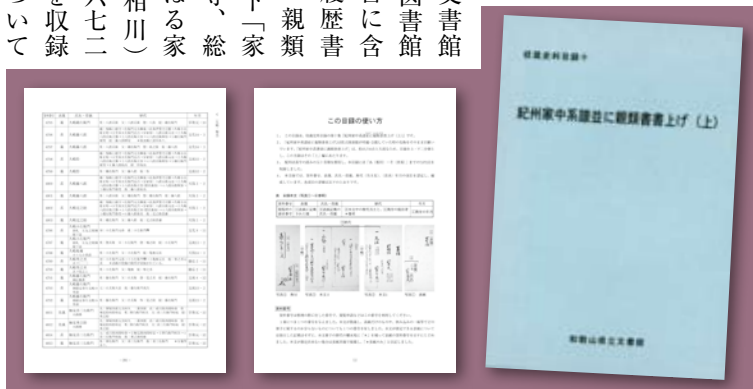
収蔵史料目録一〇
『紀州家中系譜並に親類書書
上げ(上)』の頒布について

平成二三年三月末に刊
行いたしました収蔵史料
目録一〇『紀州家中系譜
並に親類書書上げ(上)』
を一、二〇〇円で頒布し
ております。

本目録には平成五
(一九九三)年、当県立文書館
開館にもなつて、県立図書館
から移管された藩庁文書に含
まれていた紀州藩士の履歴書
とも言ふべき「先祖書 親類
書」「系譜」「親類書」(以下「家
中書上げ」とします。)等、総
数約一五、七〇〇点にのぼる家
中書上げ類の内、あ(相川)
そ(曾原)までの七、六七二
点(姓だけで五六六姓)を収録
しております。それらについて

本目録では資料番号、表題、氏名・役儀、
歴代当主(及び提出者)、提出年月の項
目を設定して編成しています。
従つて、すべての家について初代まで
さかのぼることができません。
さて、本目録に収録することがで
きた家中書上げ類の最初は、寛政八
(二七九六)年ですが、これは幕府が『寛
政重修諸家譜』を編さんするために各藩
に触れを出したことがきっかけになつた

と考えられています。その後は明治四
(一八七二)年に至るまで紀州藩では各
藩士に、家督相続や新規召抱え等の際
には「系譜」「親類書」の提出を義務付
けていました。



本目録の特徴は歴
代当主を挙げること
によつて、同姓同家
筋と同姓別家との区別
が簡単に付けられるよ
うに工夫していること
にあります。

ですから、同姓同家
筋はできる限り、提出
された年代順に集めて
います。

またこのことは、移
管された他の藩庁資料
と比較検討することに
よつて、紀州藩家臣団
の動向の具体相を明ら
かにすることを旨とする
研究者の方や、特定の
人物の親類を調査され
ている方及びご自分の

ルーツを調べていらつしやる方々にとつ
て、大いに役立つことと考えています。
なお、本目録は上巻ですので、同じ体
裁で来年には下巻の刊行を目指しており、
これについても上巻同様に頒布する予定
でおります。

本目録の購入を希望される方は、当館
のホームページをご覧いただくか、また
はお電話でお問い合わせください。
(須山高明)

文書館の利用案内

■利用方法



◆閲覧室受付に
ある目録等で必要
な資料、文書等を
検索し、閲覧申請
書に記入のうえ受
付に提出してくだ
さい。文書等利用
の受付は閉館30分
前までです。

◆閲覧室書棚に配架している行政資料、
参考資料は自由に閲覧してください。
◆複写を希望される場合は、複写承認申
請書に記入のうえ受付に提出してくだ
さい。複写サービスは有料です。

■開館時間

◆火曜日～金曜日
午前10時～午後6時
◆土・日曜日・祝日及び振替休日
午前10時～午後5時

■休館日

◆月曜日(祝日又は振替休日と重なると
きは、その後の平日)
◆年末年始 12月29日～1月3日
◆館内整理日
・1月4日
(月曜日のときは、5日)
・2月～12月 第2木曜日
(祝日と重なるときは、その翌日)
・特別整理期間 10日間(年1回)

■交通のご案内

◆JR和歌山駅・南海電鉄和歌山市駅から
バスで約20分
◆和歌山バス高松バス停下車徒歩約3分



ホームページアドレス
<https://www.lib.wakayama-c.ed.jp/monjyo/>

和歌山県立文書館だより 第31号

平成23年7月31日 発行
編集・発行 和歌山県立文書館
〒644-1100 五
和歌山市西高松一丁目七-三八
きのくに志学館内
電話 〇七三-四三六-九五四〇
FAX 〇七三-四三六-九五四一
印刷 株式会社ウイング